

BCS

BUILDING CONTRACTORS SOCIETY
PRIZE-WINNING WORKS

BCS賞受賞作品探訪記

6

第二〇回受賞作品（一九七九年）

ひろしま美術館

ひろしま美術館は、被爆者への鎮魂の祈りと恒久平和の願いを込め、「愛とやすらぎのために」をテーマとして建設された。印象派美術館として親しまれ、時と共に美しく息づく安らぎの場は地域の「こころの殿堂」となっている。



中央ホール。GRCのドーム天井でトップライトより自然光が導かれている。中央にはマイヨールの彫刻が置かれている。

建物全景。敷地は都心の中央公園内にある。建物は時と共に成長し地域と一体化する。

鎮魂と地域復興のために

ひろしま美術館は平和記念公園の北わずか五〇〇㊦、広島市の中央公園内にある。原子爆弾によって一瞬にして廃墟と化したこの地に、被爆者への鎮魂と地域復興を願う昭和五十三年三月に建てられ

た。竣工後三三年が経過したこの芸術とのふれあいの場は、時と共に地域に美しく息づく、安らぎの場となっている。

ひろしま美術館の建設には、初代館長、元広島銀行頭取の井藤勲雄氏が深く関わる。昭和二十年、広島銀行の行員であった井藤氏も広島で被爆した。広島銀行は原爆投下のわずか二日後から営業を開始し、地域住民の生活のために貢献したという。そして懸命に働き続けた井藤氏は被爆した翌年に、今世紀中は草木が生えないと言われていた瓦礫の中に色鮮やかな「百日紅と夾竹桃」が可憐に咲いた光景を目にした。その花の瑞々しさこそが索漠と荒れていた人々の心を慈愛深く癒すに違いないと強く思い、同行はその息吹を伝える印象派絵画の収集・展示を始めたのであった。マネ、モネ、ルノワール、ゴッホ、セザンヌなど誰もが知っていて親しみやすい絵画を中心として、収集された作品は昭和五十年頃までに二〇〇点近くに及んだという。そこで、広島銀行は創業一〇〇周年を機に財団を設

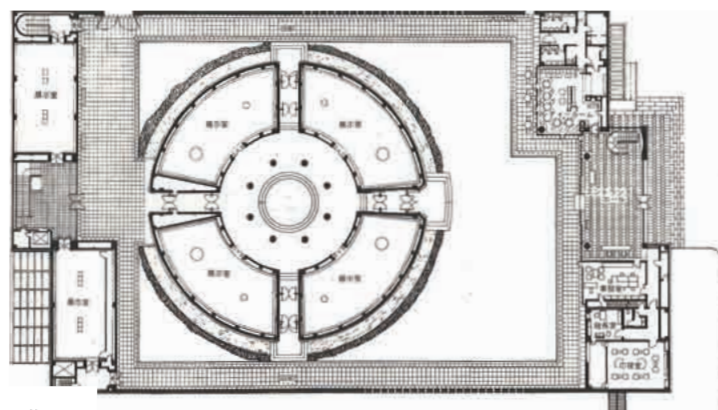
立、美術館を建設することに至ったのであった。

井藤勲雄氏の情熱

美術館の計画にあたり、鎮魂の祈りと恒久平和の願いを込め、地元で芸術と文化で「愛とやすらぎのために」をテーマとし設計を日建設計に委託した。設計当初の敷地は、殺伐とした荒地であった。そこに周囲の木々と共に景観を成し、時の重なりと共に美しく象徴化していく建築をめざしたのである。また井藤氏は、「ドームと光が欲しい」とつぶやいた。このつぶやきが具体化の核となり、「円形平面」をもつ本館とこれを包み込む回廊空間へと設計者との対話の中で発展していった。そのドームは原爆ドームを、回廊空間は広島神社の回廊を想起させるという。また本館の外部足元周りには水が設えられている。これは、熱さのあまり水を求めて亡くなられた被爆者への鎮魂の想いが込められている。このような原イメージに直結する井藤氏の熱い想いは、被爆地広島復興の思いと恒久平和へ



エントランスホールより円形の本館を見る。本館へは回廊に包まれた静かな中庭を経由しこころを鎮めてアクセスする。(写真：株式会社西日本写真)



1階平面図

計画概要

所在地：広島県広島市中区基町3-2
建築主：公益財団法人ひろしま美術館
設計者：株式会社日建設計
施工者：清水建設株式会社
竣工：昭和53年3月
敷地面積：4,398㎡
建築面積：2,385㎡
延床面積：3,099㎡
階数：地下1階 地上1階
構造：鉄筋コンクリート造



常設展示が行われている本館の展示室。3次曲面の展示壁は職人魂が高度に発揮されて入念に高品質に仕上げられた。

あたかも真正緑青のように化す、といった仕組みが当初からこの屋根には組み込まれていた。それは「時とともに」誠に鮮やかな緑色となり、美の殿堂としての象徴性を一層深めている。

建物の施工者には清水建設が選ばれ、昭和五十二年四月に工事が



計画時の鳥瞰パース。当初より館内外の森羅万象のいとなみとともに息づく美術館が構想されていた。

の折りと共に、設計と建設に関わる全ての人々に精神的連帯感を生み出した。

時と共に美しくなる

この美術館は「時間」がデザインされている。まず敷地の周囲に回廊を巡らすことで、都会の喧噪と騒音を遮断している。このため中庭は非日常的なゆったりとした時間が流れている。そこに「円形平面」をもつ本館が置かれている。



計画時の展示室のパース。展示室入口に立つとその部屋の作品群が等距離で迎えるという親しみ深い原イメージを未体験空間の中で模索している様子などが理解できる。

この円形の本館の外壁はローマン・トラバーチンである。この大理石は、経年変化により白亜化していく。これに対し回廊の外壁は擬石ブロックタタキ仕上げで、経年変化によって黒ずみ蔦が絡んで周囲の森と一体化する。この対比的变化が建物の象徴性を高めている。また屋根に用いられている銅板は、竣工時には人工緑青仕上げであった。しかしその人工緑青が森羅万象の自然のいとなみの中で、

始まった。施工に当たっては建物を「長寿命」とするため、外壁にはひび割れの防止に有効な膨張材を混和した低スランプ値（一五セ）のコンクリートを入念に打設。さらに山止自立工法を採用して、コンクリートの打継ぎ回数を低減した。また円形の本館をより美しくみせるために二二四方の現寸場を設置し、躯体、仕上げ、機器の配置を実物大の寸法で確認することによって精度の高い施工を行った。さらに型枠梁鉄筋地組工法などの採用により高所作業を削減することで、精度と品質の向上につながった。多くの技術や工夫により、時と共に美しくなる建物の仕組みが織り込まれていった。

地域の人々の「この殿堂」

本館へは静かな回廊と中庭を通り、建物四方にある入口から入る。そして円形の中央ホールから四つの展示室へと順路は特に決められていない。中央ホールは、GRCのドーム天井で、上部トップライトからの自然光が訪れる人をやさ

建築主より

文化芸術の発信基地を目指して



公益財団法人
ひろしま美術館館長
宇田 誠 Naohisa Uda

本年当館は開設三十三周年を迎えることができました。お陰様で昨年、開館以来の来場者数が五百万人に達しました。年間約十六万人が訪れます。これは地方美術館としては驚くべき数字です。初代の井藤勲雄館長は、原爆で廃墟と化した広島の人々に心のやすらぎの場を提供したいと思い立ち、愛とやすらぎのために「をテーマに美の殿堂を建設しました。その壮大な思いの実現に対し、日建設計および清水建設の方々には、大変ご尽力頂きました。また二代

目橋口収館長は、人並み外れた豊富な知識や人脈を活かし、当館の認知度の向上、企業の文化支援活動への取組の助言などから、継続的な発展に寄与されました。そして三代目館長の私は、従来型のただ来て頂くだけの「鑑賞型」ではなく、地域に開かれた「参加・体験型」美術館を目指しております。さらには地域の美術館博物館と連携し、当館を文化芸術の情報発信拠点として考えています。

本館では年中無休で常設展示を、別館では年四、五回の特別展示を、また中央ホールでは月に一回コンサートなども行っております。また豊かな感性を育てる教育にも力を入れています。二十一世紀に入り、経済が社会を支えるのではなく、芸術や文化が経済や社会を支え、活気づけていくという発想が必要だと言われます。このような発想に立ち、地域の芸術活動普及に尽力して参ります。

設計者より

全員参加でできた「この殿堂」



株式会社日建設計顧問・博士(工学)
與謝野 久 Hisashi Yozano

この作品は、私が二十八歳の頃に取り組んだ建築です。事務所長が同席でしたが、若輩者が大銀行の現職頭取と熱い対話を交わす機会を得て、建築主と設計者と施工者そして地域の人々とのオープンな協議の中で、創造のダイナミズムの素晴らしい学ばせて頂いた思い出深い作品です。とりわけ、被爆地広島復興と恒久平和への熱い想い、そして芸術とのふれあいの場のありようを、全員参加の独特の連帯感のもとで地域の「この殿堂」として創り上げた

この作品を何度も訪れる度に、建築は、時と共にハードとソフトの両面で価値豊かになるべき大切な「地域の財産」であること、その真価は完成後二〇年〜三〇年を経た頃から問われ始めるものであるとの思いを強くします。

長年にわたりこの美術館を慈しみ頂いているご関係各位の皆様にも、深甚なる謝意を表したく存じます。

しく包み込む。また展示室も円形で、展示壁面は、天井際からの照明の照度分布を均一にするため三次元曲面となっている。大変難しい工事だったという。しかし、この立体曲面は左官職人の高度な職人技によって見事に仕上げられている。昭和五十三年三月、建物は無事竣工した。

そして、美術館オープン後も、事務局のスタッフや運営を外から支える地域の人々の慈しみ溢れる

尽力などにより、快適な鑑賞環境が維持されている。このようにひろしま美術館には、建築主、設計者、施工者、職人そしてスタッフと地域の多くの人々の熱意による「地域の協働作業」で当初の願いが今も息づいている。だからこそ、地域のこころの建築として親しまれているのであろう。この美術館すべてが、展示作品の印象派絵画の「光」というテーマを標榜している。



施工中の様子。コンクリートの躯体が立ち上がり外壁の大理石を取り付けている。周囲に森はまだない。



現場の様子。躯体・仕上げ・機器などを同時に墨入れし、円形建築ゆえの高い精度の確保に務めた。

施工者より 高い施工精度と 品質管理



元清水建設株式会社
沖花憲二 Kenji Okihana

施工の品質目標としてまず掲げたのは「施工精度の向上」です。さらに、常に「美」を意識して臨むよう、全員の心を合わせました。施工計画段階で念頭に置かなければならないのは、貴重な芸術作品を最適な環境で展示・保存するという美術館の本分です。照明、温湿度の調整、盗難防止など、建物の機能が十分に発揮されるように、建築・設備の各工事を一体的に計画しました。施工図には、手戻りがないよう職種を超えた取合い部分を相互に記載しました。ま

た、特殊な材料を多く使用するため、勉強会も活発に行ないました。建物の平面形状が円形のため、細部の納まりが非常に難しく、慎重に施工をすすめました。仕上げ段階では、重厚なイメージを醸し出すために多用された高品位な素材を疵つけないよう、取り扱い・養生に大変気を配りました。特に緑青銅板葺き、大理石、鏡面仕上げステンレスなどは大切に扱いました。躯体や仕上げから発生するアンモニアガスや水分が美術品に悪影響を与えてはいけません。このため養生期間と換気には細心の注意を払いました。

この現場では、高い施工精度と品質管理、建物の堅牢さと長寿命の確保、省資源化・省人化・維持管理の容易性等への対応を目指し、丁寧な具現化していきました。時を経て改めて訪れるたび、手前味噌ですが、当時の努力が活きていることを再認識します。